
「トライアングル＝エクシード/一光の魔女」

らいなあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

「」のPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「トライアングル＝エクシード／光の魔女」

【Zコード】

Z0513V

【作者名】

らいなあ

【あらすじ】

地球とは別の異世界。そこには「科学」が在り、「魔法」が在り、「鍊金術」が在った。そんな世界である日、一組の兄妹の両親が殺されてしまう。両親を殺した女性は「魔法」の頂点さきにきよつ。少年は妹とハグしてしまが、両親を殺した女性への復讐の為に「科学」を極める。それから十年が経った時、何故か少年は仇の女性と一緒に居た……。

第0光 始まりの魔法（前書き）

お早ひき御座います、今日は、今晚わ。らいなあです！

これは「科学」と「魔法」と「錬金術」を題材にしたバトルファンタジーです。（多分）

警告はあつませんが、不定期になる予定です。悪しからず。では、お楽しみください。

第0光 始まりの魔法

「お父さんーーお母さんーー」

燃える民家の内で小さな少年が両親を呼ぶ。——しかし返事は返つて来ない。

「お父さんーーお母さんーー」

更に強く名を呼ぶ。——が、やはり返事は返つて来ない。

「おにいちゃん……」

側に居た妹らしき少女が少年の袖を引く。瞳に映る色は不安と悲しみ。そんな妹を見て少年は……。

「だ、大丈夫だつて、心配するなミレア」

流石^{さすが}、兄と言つべきか。こんな状況下で妹を心配させまつと、自分の感情を押し殺して妹を宥める。だが、まだ幼い少年。完全に押し殺せるはずも無く、不安がちらほらと見え隠れしていた。

意外と子供と言つるのは感情に機敏に反応するものだ。兄の見え隠れする不安を感じ取つた妹は、今にも泣きそうな表情で少年の袖にしがみ付いている。

少年はそんな妹を守るように後ろに回し、とりあえず脱出しようと出口へ向かう。そんな「一人の前に」……。

「あら? 子供?」

推定二十歳前後ぐらいの若い女性が立つていた。その足元には真っ赤な液体が海の様に広がつていて。

「お父……さん? お母……さん?」

少年は驚愕する。何故なら真っ赤な海に沈む様に、兄妹の両親が横たわつていたからだ。

「なに……を?」

無意識に妹にその光景を見せない様にしつつ、少年は女性に問い合わせていた。

「殺したのよ」

女性はケロッとした表情で即答した。その顔色には罪の意識など欠片も無い。

何故か？」

ドンドン嗄れしていく声を振り絞り、もう一度女性に問いかける少年。

「さあ？ 邪魔だつたんじやない？」

まるで他人事の様に首を傾げた女性に、ついに少年の我慢も限界を超えた。

少年はどこで覚えたのか、とてもハ雫の少年とは思えな^シ声で女性に殴りかかる。

「危ないで……しょっ！」

だが所詮は子供、殴る前に女性に簡単にあしらわれてしまつ

卷之三

「眠りなさい」

素早く少年の目の前に移動した女性が手を少年の顔に翳すと、紫色の小さな魔法陣が現れ、少年の意識を一瞬で奪う。

「おにいちゃん！？」

に兄の心配をする。

「妹？ 貴女もお休みなさい」
あなた

「コジコジ」とハイヒールの音を鳴らしながら、女性は少女の目の前

女は意識を失つた。

女性は少女と少年を抱え、死んだ人には田も廻らずに民家を出る。

「はあ、汚れ役つて辛いわあ……」

女性の髪は風に流れられ、誰の耳に届く事無く消え去る。

女性が屈んで跳躍の準備をすると、地面に先程より大きな白色の魔法陣が現れ、高速で回転を始めた。そして女性は足を伸ばし切つて跳躍する。それを補助する様に魔法陣が跳ね上がり、現実に女性を高く高く押し上げた。

「さあて、どこ行こつかな？」

次々と現れる魔法陣を蹴りながら、空中を駆けて行く女性はそう言った。

第0光 始まりの魔法（後書き）

いかがでしたでしょうか？

次回は一気に飛んで十年後。主人公の少年が十八歳の時になります。
御意見御感想をお待ちしています！

第1光 一等機構士の天才（前書き）

今回、説明が多いかもしれません。
気を引き締めないとヤバイかもしれません。

第1光 二等機構士の天才

とある少女の、絶叫にも似た起床を促す声に、止む無く少年は身

少年の

少女の機嫌も中々悪い。

貴方今日が何の日か忘れてる話じゃないでしょ
うね！？」「さあ！アグト

メートルと離れてない距離から、一キロ先まで届きそうな声量で少女は叫ぶ。

故は「アグトと呼ばれた少年が目を塞ぐのは当然の事柄だな」
これで元より機嫌が悪い少年の機嫌が目に見えて悪くなつていくのは、当然の結論だ。

「あ、貴方……！」

少女の顔色が見る見る真っ青になつていいく

アケトといふ少年は何か不味い事でも言つたのだと云ふが？

「げげげ、元帥様をジジイだなんて！しかも一等機構士級授与式をルミエヌテスお遊戯ゴシコー？貴方正氣！！？」

相も変わらずガミガミ、近くに居るのに叫ばなければ少女は話せないのだろうか？その位声量が大きすぎる。深夜なら間違い無く近所迷惑レベルだ。

訂正しなさい！私の夢を訂正してやる！！

少女はアクトの首をガツシリ掴み、取れるんじゃないかと言う程前後に振り出した。

先程の話では、どうやら少女の夢は一等機構士と言つものになりたいらしい。見た所、少年と少女の年齢は同じ位だから、少年が少女より優れている事を証明しているのだろう。

睡眠を邪魔され、頭を振られ、いい加減アクトの怒りも頂点に差し掛かつた。

「ああもうー事実だろうがーお前も俺に構つてゐる暇があつたら訓練でもしてるー！」

アクトはそれだけ言つと、明らかにイラついた足取りで何処かへ行つてしまふ。

それを見ていた少女はと言つと、

「私の夢ー」

遠くなるアクトの背中に手を伸ばして泣き掛けていた。ハツキリ言つて馬鹿である。

この世界には三つの強大な力がある。それが「科学」であり、「魔法」であり、「鍊金術」だ。その三つの強大な力をそれぞれで独占する三つの国家。

科学を有する『科学國家ヴァンデル』

魔法を有する『魔法國家フォルティス』

鍊金術を有する『鍊金國家マグリシア』

この世界ではこの三つの国家が三つの巴の情勢を保つてゐた。

他が有する力を手に入れる為に、三つの国家がそれぞれで他国家に戦争を仕掛けている。

だが戦力は均衡し、それ故の終わらない戦争を続けていたのだ。

これはそんな情勢の中、とある者達が経験した物語である。

先程アクトと呼ばれた少年と、そう呼んだ少女が所属するのは『科学國家ヴァンデル』。

帝国主義の国家で、大元帥を長とする元帥機関によつて統治・管理されている。

領土は陸続きで領土のほぼ中心に、『帝都・ヴェンドリア』がある。アクトと少女は、帝都の軍士養成所所属の士官候補生だ。二人はその帝都の兵舎に寝泊りしていた。

町外れにある兵舎から出てきたアクトは誰が見ても不機嫌そうだ。背後に鬼の様なオーラを漂わせている。

「あんのくそフィル！どこまで俺の邪魔をすれば気が済むんだ！！」あの少女はフィルというらしい。性格は言わずもがな。アクトの言動から見ても、お節介と言うか何と言うか。アクトは迷惑しているようだが。

「よう、アクトくん~」

グチグチと口頃の不満を吐露していたアクトの前に、太った体型の馬鹿みたいな顔をした男性が近付いて来た。その口調は馬鹿にして言うか、おちょくつていると言うか、とにかく瘤に触る声音である。

「何だ？」

明らかに年上でも、相手の事を知つて無くても関係無く、アクトは不機嫌さを隠す気も無く睨んだ。

「おうおう先輩でも関係無しかよ。一等機構士級を授与されるからつて調子に乗つてんじゃねえのか？ああ？」

一等機構士とは階級みたいなモノの様だ。先程の少女の反応とこの男性の反応から察するに、一等機構士はそう簡単に取れる物でも

一等機構士はそう簡単に取れる物でも

ないのだろう。

アクトは心の中で「またか」と、半ば諦めた様子で呟いた。

昔から口調とか目付きのせいでケンカを売られた事はあったが、
一等機構士^{ルミエヌステス}授与^{ルミエヌステス}の話が出た途端、前にも増してケンカを売られるよ
うになつた。所謂妬みである。

この男性もその一人、一等機構士^{ルミエヌステス}になれなかつた哀れな軍兵なの
だろう。

「妬みでケンカを吹つかんじゃねえ。お前と違つて俺は忙しいん
だ」

「い、こんの……！」

図星を言われたからか。はたまた口調からか。男性は怒りを携え
たまま、力の限りアクトを殴りつと拳を振り上げた。腰の入つた威
力のありそうなストレートの上、その手に白色の光が纏われている。

「遅い」

しかしアクトは意に介さず、少し左にずれた。アクトの右頬を拳
が掠めるが、それは掠めたと言つより、完全に見切つて回避したと
言う方が正しい。

次の瞬間、アクトの後方にあつた地面が音をたてて少し抉れた。
男性のせいである。

しかしアクトはまたも意に介さず、カウンター氣味に、白色の光
を携えた右拳で男性の右頬を掠めた。避けられたのではない。当て
なかつたのだ。というより男性には速過ぎて見えなかつた事だろう。

男性の右頬を掠め、伸びきつた腕を戻したアクトは、何も言わず
に振り返つた。

刹那、男性の後方にあつた地面が爆発音と共に“無くなつた”。

深さ二メートル、全長十メートル程のクレーターが出来ていたの

だ。

男性はそれを見た瞬間、腰を抜かして地面に倒れ付す。

「お前ならどういう事か分かるだろう？これがお前と俺の実力差だ」アクトはそれだけ言うと、また何処かへ歩いて行った。後には真っ青な顔の男性とクレーターがあるだけだった。

先程のワザは簡単な原理だ。白色の光の正体は“^{ヒート}圧縮された万能粒子”。

軍に入った兵士候補生は最初の武器として、“^{ヒートリング}粒子発生装置”という腕輪を渡される。これは^{ヒート}圧縮された粒子を、攻撃・防御・身体能力強化に転用できる腕輪型の装置だ。

使用者の脳波を感じし、使用者が思った通りに粒子を発生させる。つまりは、使用者次第で無限の可能性を秘めているのだ。

男性はそれを拳に付加し、一時的にストレー^{ヒート}トの威力を高めた。養成所に入つて最初に習う、簡単な攻撃方法だ。男性はそれで、拳を当ててない筈の地面を抉るという事をやって見せた。あれは熟練した兵士でも無い限り不可能である。それが、男性は強いと言う事を証明している事に他ならない。

しかし、アクトは同じ攻撃を放つたにも関わらず、深さ一メートル、全長十メートル程のクレーターを作つて見せた。ようはどういう事か？

単純明快、男性とアクトの実力差を示しているのだ。

男性がどの位強いか分からぬが、アクトの敵ですらなかつた訳だ。もし、あの攻撃を男性に命中させていたら、今頃男性は髪の毛すら消え失せていた事だろう。

「大体、一等機構士を授与されると言う事はそれだけ実力があると何故わからねえんだ？どいつもこいつも……」

自分で言つなといふ感じではあるが、アクトの言つ通りである。ファイルが「^{ルミエーステス}一等機構士を夢見るだけあって、敷居は途轍もなく高い。

筆記テストで満点の九割点数を取らなければ即落第の上、実技テストで審査官から一本取らなければ受かる事は出来ない。

更に審査官は「科学」の頂点^{トッピング}、その直属の独立部隊が引き受ける。頂点の独立部隊は、一人で万の敵を蹴散らす程の実力者が何人居る部隊だ。

間違ひ無く、気を抜けば一瞬で塵^{ちじ}に成れるレベルの実力だろう。でもそれを、アクトはノーダメージで勝つ事が出来た。筆記は文句無しの満点。

以上の事からアクトは間違ひ無く天才と呼ばれる部類だ。先程の男性なんて一般人と大差無い位に。

「授与式は夜からだつたな。外でもぶらついてくるか」
アクトは街中へと足を向けた。

この広大な帝都では交通機関がうづぎつたる程ある。

電車、地下鉄、モノレール、車、飛行車。もはや地上も空中も常に何かが走っている様なものだ。

歩く奴なんてよつぽどの物好きか、金が無い貧乏人ぐらいだろう。

アクトは士官候補生なので、国から給料を貰つてゐる。しかも現在、二等機構士級を受け賜つてゐるので、そこら辺の儲かつてゐる商家より金を持っている。ましてやアクトはあまり金を使わないの^{ミニアリア}で、資産総額は馬鹿みたいにあるだろう。

しかし、アクトはあまり乗り物を買いたがらない。歩くのが好きなのだ。

実を言うとアクト自身、その理由が分かっていない。

「何でだろうな？」

中心部にある商業区を歩くアクトは、そう呟いた。

彼は思う。今日で二等機構士から一等機構士になるんだ。

月収は一等機構士の三倍、下士官への命令権、直属兵士の任命、一般雑務の免除、その他にもメリットは色々ある。ただ、元帥直々の特殊任務や下士官への実技指導・筆記指導などの仕事も新しく追加されてしまう。アクトとしては面倒臭いみたいだ。

ちなみに今、アクトは軍士養成所所属の士官候補生なのだ。簡単に言えば、『まだ訓練生』と言う事。

訓練生でも階級は与えられるが、軍士養成所時点で一等機構士を受け賜るのは、『科学國家ヴァンデル』の約三千年の歴史上、八人程度だ。

アクトがその九人目という事になる。

更に言つなら、その八人の内五人が「科学」の頂点になつていてる。アクトは頂点に一步近付いたと言う事だ。

何て考えていると、正門の所まで来たみたいだ。アクトは正門を見上げながら、思考をする。

無駄だろう、と。

全高七百メートル（東京タワーの約二倍）、横幅三百メートル、厚さ一メートルという、無駄を詰め込んだ様な正門だ。しかも、通常はその横にある副門（全高五メートル、横幅五メートル）を使つていると言うのだから無駄でしかない。

正門を使う機会なんて、待ち合わせか、帝都の全軍が他領土へと進行する際にしか使われない。

正門が開くのは、全軍出陣の合図みたいなものだ。無駄である。

更に更に、あんなに大きな正門を造つても、帝都の上空には敵の

侵入を許さない不可侵領域^{パリアティールド}が張り巡らされている。これを行き来出来るのは、軍に登録された味方だけだ。

まあ、国家の象徴といえば、正門の価値も多少はあるが、やはり無駄である。

アクトは無駄無駄考^{スル}ながら、副門に居る武装門番^{ゲートキーパー}に士官候補生用IDカードを提示する。IDカードは帝都民だつたら誰もが持つている身分証だ。

「士官候補生？何の用だ？」

武装門番^{ゲートキーパー}が不審^{スル}がるのも仕方が無い。

本来、士官候補生は軍士養成所を卒業しないと、外に出るのは不可能だからだ。

だがそれも、階級の問題である。

「ん？階級は…………一等機構士！？」^{ミリアニア}すいませんでした！…

「いや、いい」

アクトの階級を見た瞬間、武装門番^{ゲートキーパー}は血相を変えて腰を曲げた。しようがない事だ。士官候補生とはい^{ハシマ}え、上官に^{たてつ}盾突いたら死罪が基本だからな。

と言う事から、この武装門番^{ゲートキーパー}は二等機構士^{マシリスローカ}という事になる。

武装門番^{ゲートキーパー}はそこそこ力が無ければ勤まらないので、三等機構士^{マシリスローカ}以上じゃないと武装門番^{ゲートキーパー}には就任出来ないのである。

ちなみに階級は一等から五等まである。

一等機構士。
二等機構士。
三等機構士。
四等機構士。
五等機構士。

更に、騎兵・歩兵・重機兵・砲撃兵・救護兵などなど。役職^{クラス}によつて呼び名は変わつたりする事もある。

アクトは士官候補生ではあるが、役職の中でも特殊とされている
戦鍵兵ヴァンをを目指しているのだ。

クラス
話を戻して。

アクトはIDカードを帝都民認証装置IDスキャナーに通し、副門を抜けていく。
後ろの方で、先程の武装門番ゲートキーパーが「いつてらっしゃいませ！」とか
明らかに媚びた様子で言っているが、アクトは全く聞いていなかつ
た。

第1光 一等機構士の天才（後書き）

いかがでしたでしょうか？

次回は何時になるのやら……。まあ、頑張ってみますけど。
御意見御感想お待ちしています！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0513v/>

「トライアングル＝エクシード/一光の魔女」

2011年8月5日03時24分発行